

IPCC 1.5°C特別報告書

2018年10月8日公表

- IPCC（気候変動に関する政府間パネル）：1988年に設立された政府間組織。気候変動に関する最新の科学的知見を各種報告書としてとりまとめ、政策の科学的基礎を提供する（報告書自体は政策中立なものであることを原則とする）
- COP21において、UNFCCCからIPCCに対して「1.5°Cの地球温暖化による影響、および関連する温室効果ガスの排出経路について、2018年に特別報告書を作成すること」を招請。IPCC第48回総会（2018年10月1日-6日 韓国・仁川）において1.5°C特別報告書が承認・受諾された。

『1.5°Cの地球温暖化：気候変動の脅威への世界的な対応の強化、持続可能な開発及び貧困撲滅への努力の文脈における、工業化以前の水準から1.5°Cの地球温暖化による影響及び関連する地球全体での温室効果ガス(GHG)排出経路に関するIPCC 特別報告書』

セクションA：1.5°Cの地球温暖化の理解

- 工業化以前の水準よりも約1.0°Cの地球温暖化をもたらしたと推定される。地球温暖化は、現在の進行速度で増加し続けると、2030年から2052年の間に1.5°Cに達する可能性が高い。（確信度が高い）（A1）

セクションB：予測される気候変動、潜在的な影響及び関連するリスク

- 気候モデルは、現在と1.5°Cの地球温暖化の間、及び1.5°Cと2°Cの【地球温暖化の間】には、地域的な気候特性に明確な違いがあると予測する。（B1）

【1.5°C上昇と2°C上昇の影響予測の違いの例】

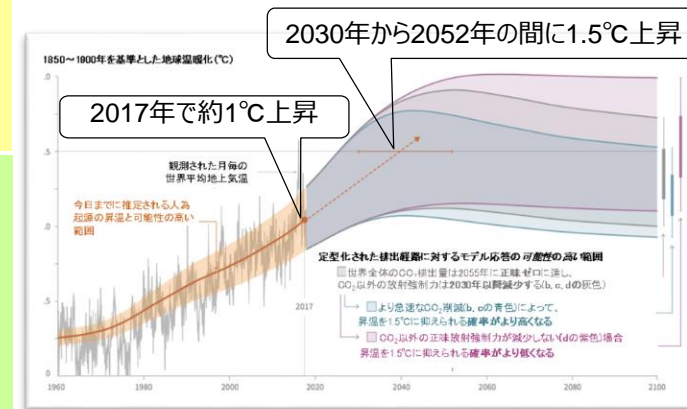
- 人間が居住するほとんどの地域における極端な高温の増加（確信度が高い）（B1）
- 海水面の上昇（1.5°Cの場合、2°Cよりも上昇が約0.1m低く、リスクに曝される人口は最大1千万人異なりうる）（確信度が中程度）（B2.1）
- 夏季における北極の海氷の消滅（2°Cだと10年に1回、1.5°Cだと100年に1回程度）（B4.1）
- サンゴ礁（2°C:ほぼ全滅（確信度が非常に高い）。1.5°C:70-90%死滅（確信度が高い））（B4.2）

セクションC：1.5°Cの地球温暖化に整合する排出経路とシステムの移行

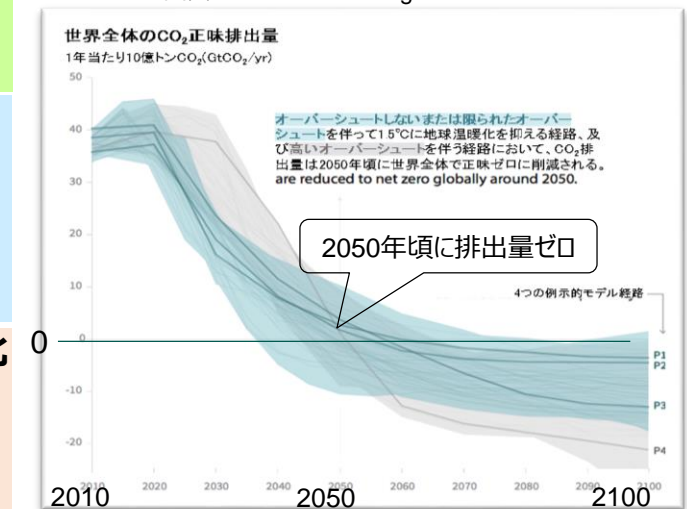
- 将来の平均気温上昇が1.5°Cを大きく超えないような排出経路は、世界全体の人為起源のCO₂の正味排出量が、2030年までに、2010年水準から約45%減少し、2050年前後に正味ゼロに達する。（C1）
- エネルギー、土地、都市及びインフラ（運輸と建物含む）、並びに産業システムにおける、急速かつ広範囲に及ぶ移行（transitions）が必要となるであろう（確信度が高い）。（C2）

セクションD：持続可能な開発及び貧困撲滅への努力の文脈における世界全体による対応の強化

- パリ協定に基づき各国が提出した目標による2030年の排出量では、地球温暖化を1.5°Cに抑えることはないであろう（確信度が高い）。（D1）
- 将来の大規模な二酸化炭素除去(CDR)の依存の回避は、2030年よりも十分前に、世界全体のCO₂排出量が減少し始めることによるのみ実現される（確信度が高い）。（D1）



図：観測された気温変化及び将来予測
出典：IPCC SR1.5I Fig.SPM1a



図：1.5°C経路における世界全体のCO₂排出量
出典：IPCC SR1.5 Fig. SPM3a